

日本語教育実践研究（8）

—「日本語音声教育」の実践—

戸田 貴子

日本語教育実践研究（8）は、「日本語音声教育」について、実際の発音指導を通じて研究するためのクラスです。実習では、中級前期の学習者が受講する発音指導 A クラスに参加し、個別指導を中心とした発音指導を行います。

2004 年度秋学期は、発音指導 A クラスを受講する日本語学習者が 33 名、実践研究を受講する大学院生が 7 名の計 40 名で、各院生に対して 4～6 名の日本語学習者のグループに分かれて活動が行われました。大学院生 7 名中、「音声研」の在籍者が 1 名で、6 名は他研究室に在籍していました。受講動機は「現場で我流で身につけた発音指導法を修正し、理論的裏づけのある有効な発音指導法を身につけたい」、「さまざまな国からの学習者の発音に触れ、比較検討する機会を持ちたい」、「学習者の誤用の特徴と原因を知りたい」、「学習者の誤用に対して適切なアドバイスを瞬時に出せるように実践を積みみたい」、また、留学生として、国に帰って日本語を教える予定なので「この実践研究を通して正確な日本語の発音を身につけたい」など多種多様でしたが、全員がコミュニケーションにおける音声の重要性を認識しており、実践研究では活発な議論が行われました。また、授業時間外での準備や院生が主催する検討会においても努力を惜しまず、多くの時間を割いてきました。

中には、上級レベル対象の発音指導 C クラスに院生ボランティアとして参加したことがきっかけで興味を持ったため、実践研究を受講し発音指導 A クラスに実習生として参加することになった院生や、逆に、実践研究を受講したあと、発音指導 C クラスに自ら院生ボランティアとして参加することにした院生もいます。また、実践研究の受講生は理論研究も受講し、音声学と音韻論の基礎について学ぶことができました。このようにして、理論研究としての学びの場と実践の場が統合されつつあるという実感を持ちました。

今後は、実践研究の枠を離れますが、本稿とは異なった視点から研究が継続され、発表される予定です。実践研究を足がかりに、自律的な教師として、また研究者として大きなステップを踏み出すことができる基盤が少しでも構築され、今後につながっていけば幸いです。

（トダ タカコ・日本語教育研究科助教授）